

思われたが、次第に本領を発揮し始めた。音楽監督就任後初のドイツ・オペラの新演出で、聴衆は明らかに彼の度量を試していた。休憩のたびに拍手が増し、好調に見えていたが、終演後にはまずブーイングで迎えられ、ブラヴォー派と戦い、最後には拍手が勝ったようだ。それを超越して公演として大成功だったのは、キャストの力が大きい。

一番ネームヴァリューがあるのはアムフォンタス役のT.ハンブソン。オーラをピンピンに出してはいたが、声量的には苦しい部分もあった。グルネマンツ役のM.サルミネンと並んで、無難ではあるが、句を過ぎたキャストイングかもしれない。クンドリー役のY.ネフは弱音も高音も健闘しており、適役かと思われたが、誘惑を拒絶された後のシーンで、不快に叫ぶ音を連発し、残念だった。意外に光っていたのが、クリングゾール役のE.シリンス、そして、掘り出し物は題名役のS.スケルトンであった。「オケにフォルティッシモの表示がある部分は、歌手の声が聞こえなくても、それがまた、オペラの現実」と、現地の新聞でインタビューに答えていたガッティの鳴らすオケの音量に勝ち続けただけでなく、人間味のある表現が光った。

C.グートの演出も、単純ながら解りやすく、ブーイングと賞賛に包まれたが、最終的には受け入れられていた。あとは回を重ねるうちに、神聖さが醸し出されてくることを祈る。(中 東生)

## CONCERT 6月 コンサート、イベントから EVENT

**Opera** チューリヒ音楽祭でガッティ指揮《パルジファル》新演出  
今年も6月18日からチューリヒ音楽祭が開催されており、26日には音楽祭プレミアの《パルジファル》が上演された。序曲は、このオペラ特有の聖なるオーラが感じられず、イタリア人指揮者のD.ガッティができるワーグナー解釈の限界かと